HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	観光研究へのアクター・ネットワーク論的アプローチ : 北海道における中国人観光者の実践を例として
Author(s)	周, 菲菲
Citation	研究論集, 13, 111(左)-135(左)
Issue Date	2013-12-20
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/54066
Type	bulletin (article)
File Information	007_ZHOU.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

観光研究へのアクター・ネットワーク論的アプローチ

── 北海道における中国人観光者の実践を例として ──

周　　菲菲

要　旨

この論文は，観光研究におけるアクター・ネットワーク論的なアプローチの必然性と可能性を探求する。まず，従来の観光研究における全体論的な視点の欠如とモノについての考察の不足といった問題点を指摘する。観光地対観光者という二分法や，イメージ論のような表象分析の枠では，観光実践の複雑性を十分に研究することができない。ここで，関係の生成変化に注目し，人やモノ等の断片的な諸要素を，諸関係を構成する対称的なアクターと見て，それらのアクターが織り成すネットワークの動態の過程を把握するアクター・ネットワーク論に注目する。そして，観光におけるモノの物質性と場所の多元性の存在を論証し，観光者のような特定のアクターが観光ネットワークの中で他のアクター（地域イメージ，モノ等）を翻訳し，自らの実践に導く様相を，先行研究に基づいてまとめる。さらに，中国人の北海道観光を例として，アクター・ネットワーク論に基づき，個的実践の共有化の過程と，地域イメージのブラックボックス化の過程をまとめた。最後に，観光研究へのアクター・ネットワーク論的アプローチを，地域の複数性を提示する研究として提示してみた。

はじめに ── 問題の所在

近年，人類学においては，表象や意味の解釈に向かった認識論的な研究から，ヒトやモノが織りなす多様な世界の存在論的な探求への転換がみられる（宮武 2012：1）。すなわち，人間とモノ，主体と客体，物質と精神といった従来の二分法を退け，これらを生成させ変換させる関係性についての論証である（春日 2011：11）。アクター・ネットワーク論の研究はその一環であり，その中において，ラトゥールは本質ではなく，「本質に意味を与えている媒介者，代理人，

翻訳者を導入」（ラトゥール 2008：217）する視点を唱道している。アクター・ネットワーク論は，科学技術や経済モデルなどの限定された領域にとどまる傾向があるが，本論でまとめたように，最新の観光研究への浸透も見られる。それらの研究に通底するのは，社会や文化・民族を記号や象徴といった表象を通した理解と，観光者と観光地・ホスト ── ゲスト関係といった二分法を退ける考えである。モノの物質性と観光における空間性についての全体論的な議論が行なわれ，アクターの翻訳過程についての事例研究も幾つか出ている。しかし，それらの先行研究はいずれも地域住民の実践や，観光商品の開発・宣伝・運営過程に焦点を当てており，観光者の実践から出来上がるネットワークは見過ごされがちである。本論は，観光者の実践における翻訳過程における従来の観光商品の開発理念とは逆転した予想を明らかにした。そして，個々の実践が共有され，ブラックボックス化される現実を議論するアクター・ネットワーク論の可能性を探り，その努力がいかなる研究モデルにつながるかを提示していきたい。

1　これまでの観光研究の問題点

1.1　観光研究における「全体論」的な視点の欠如

観光研究，あるいは「観光学」（tourism studies）では従来，観光者と観光地の人々，そして両者を仲介する役割を担う人々が関与し創出する「観光の現実」を解明し，研究の成果をその人々に還元するのかを前提にしている（橋本 2013：20）。また，観光地が地理的に境界付けられた目的地として見なされている中，研究の焦点は，組織化されたマーケティング戦略に向けられがちである（Baerenholdt et al. 2004: 79）。したがって，目的地は，魅力とさまざまな設備（例えば，交通機関，宿泊設備，食べ物や観光経験など）（Tinsley and Lynch 2001: 369）の容器（container）としか見られてこなかった。その結果，観光実践の複雑性の把握は，観光者と観光目的地の中の観光組織者という二元論によって遮られているのである（Johannesson 2005: 135）。

この実学的ともいえる特徴が観光研究を，現場と極めて密接な関係を持つ学問にしてきたので，観光研究ははじめから人類学から大きな影響を受け，たくさんの人類学者によって行われてきたのである。しかしながら，人類学における「ホーリスティック」な研究への追求と，対象民族・社会の全体像を記述する方法は観光研究ではあまり見当たらない。つまり，これまでの観光研究は，学問分野ごとに発展し，研究対象もおのずと分野ごとの関心に絞られる傾向にあったとされている（橋本 2013：20）。

橋本和也はさらに，観光者については「観光者送出社会」についての研究を進めてきた社会学・人類学などが，以前植民地化されていた地域や古い慣習を残す社会については人類学・民俗学などが，観光地の景観やまちづくり，地域行政，都市計画については地理学や建築学，環境学，政治・行政学などが，旅行業や商品開発などについては経済・経営学やマネジメント・

ホスピタリティ研究などが取り上げてきたし，さまざまな観光現象の重なりを研究する分野もあり，ほかにも新たな観光の形態も注目を集めていると指摘する（橋本 2013：20）。このように，さまざまな研究領域において観光という現象が扱われているが，各研究分野において観光を専門とする研究者が少数である上，分野を越えるような議論もあまりなされておらず，これからの急務とされている。これに対して橋本は以下の二点の展望を示した。まずは，あらゆる研究分野を網羅した「ホーリスティックな観光研究」が必要であり，次は，個々の観光者の「観光経験」がいかに「全体像」となる「観光の現実」に連結するかについてであり，アクター•ネットワーク論をはじめとする，人類学における最新の存在論的アプローチによって考察すべきとされている（橋本 2013：21）。

橋本の指摘は，観光研究における全体論な視点[1] の欠如の一端を明らかにしている上，個々の観光者の観光経験への着目もこれからの観光研究においては重要になるであろう。観光を「全体」として記述しようとするとき，人類学における全体論に対する新たな批評が参照になる。Nils Bubandt と Ton Otto は『全体論における実験』（Bubandt and Otto 2010）の第一章「人類学と全体論の苦境」（Anthropology and the Predicaments of Holism）の中で，人類学の特徴（hallmark）としての全体論とコンテクストとの関係性を論じた。より広いコンテクストと結び付いた全体論は人類学的試みの核心にあり，それをめぐる現在の関心が，実は全体論の人類学的伝統への斬新的で経験的なアプローチの前兆だという（Bubandt and Otto 2010: 1）。観光研究には，量的データが必要である一方，地道な質的調査（参与観察，グループ討論など）も不可欠である。質的調査を通じて生活の全体を捉えようとする人類学における全体論への議論は，観光により地域が直接に世界へと接続する新現象に注目する観光研究にとっては実に有用な点である。また，領域横断的な枠組みへの模索と，全体論的な議論の可能性（足立 1999）を提供するアクター・ネットワーク論はとくに参照になる。

以上，従来の観光研究においては，全体論的な視点の不在が伺える。この中には特に，観光の視覚的・記号的方面への重視に対し，モノについての考察はごく少なく，ほとんどは「みやげもの（souvenir）研究」に集中していることが指摘できる。1.2 で見てみよう。

1.2　観光研究における「イメージ」と「モノ」

ブーアスティンは，『幻影の時代』で前近代の観光について，「冒険の旅」と「何が起こるかわからない旅」と述べ，それは，前近代の大多数の人が地域社会のなかで，限られた生活空間のなかで「細々と暮らしているが，それを飛び出していく人たちは，非日常的な」（ブーアスティン 1974：63）経験を求める傾向が強いと指摘している。それに対し近代の観光を，「擬似イベント」と呼び，「旅行者の没落，観光客の台頭」という言葉で 20 世紀の傾向を端的に言い表した（ブーアスティン 1974：96）。すなわち，前近代の，見知らぬ土地への冒険としての旅行ではなく，ガイド付きの観光が主流になったとのことである。この「擬似イベント」とは，人々がメ

ディアで得たイメージに注目し，そのイメージは人間によって与えられたイメージが，本来の出来事の持つ偶発性を失って，仕組まれた／社会的に用意されたものを指し，観光旅行こそ擬似イベントの典型だとブーアスティンは指摘している（ブーアスティン 1964：p.268）。擬似イベントの生産には，交通手段，メディア，娯楽施設や観光者の収入や休暇時間などのモノは必要な要素として扱われるが，それらのモノの重要性やエージェンシー[2] についての論述は非常に少ない。このように，観光を特定の目的のために，イメージの操作を含める人工的な作業によって創りだされるもの（ブーアスティン 1974：17）とする見解が，ブーアスティン以降の観光研究・メディア研究および大衆消費論において継承されてきた。

また，観光は記号によって構築される集合体とみなすジョン・アーリは，観光客は何らかのフィルターを持って観光地を見ていると述べ，そのフィルターを「まなざし」と呼んだ（アーリ 1995：6）。この「まなざし」というイメージもあらかじめ生産されたものを指している。「まなざし」論は，観光地やまなざす対象から独立した観光者を描いているので，観光者の経験を単純な「見る」行為，つまり観光者による記号とイメージの収集および消費活動の一種としてしか捉えていない。「まなざし」論は，ポスト・モダンの観光研究としてみることができるが，その本質は，観光事業のネットワークに関する標準的な数値分析とさほど異なってはいない（Johannesson 2005: 136）。いずれも，観光者とホスト，日常的なホームと非日常の観光地というような明白な区別に基づいている。一方は「産業的」な生産者であり，もう一方は，ポスト・モダンの消費者である。

日本では凡そ 15 年ほど前から観光というトピックが人類学・社会学の研究対象に入れられ，主にはブーアスティンとアーリの考察に基づく事例研究が行なわれてきた。具体的には，観光を生み出すしかけ，観光がホスト社会に与える影響，観光によって創りだされる文化の三つの視点による検討であり，総じてホスト側の社会が考察の対象とされ，「観光活動が地域に与えるインパクト」を捉えようとする考察が主流を占めてきた。その中で，太田好信が示した「文化の客体化」（1993）をはじめ，観光を担う「ホスト」側の主体性に立脚し，ホスト側が自文化を客体化し，地域イメージを生産することを通して自己のアイデンティティを形成する過程についての先行研究が蓄積されてきた。「異郷において，よく知られているものを，ほんの少し，一時的な楽しみとして，売買すること」という橋本和也の観光に対する定義も多く使われていた。ここの「よく知られているもの」は無論，「広範囲にわたって普及されているイメージ」に置き換えても違和感が生じないであろう。21 世紀に入って，観光者による「観光経験」が注目されるようになったが，観光はなお「日常的に身近にあふれるテレビの映像や情報，雑誌，アニメ，映画などのさまざまなメディアによって醸成された，いわば『オリエンタリズム』的に切られて構成されたもの」（橋本 2011：19），すなわち，依然として記号の集まりとしてのイメージとしか見なされていない。さらに，観光研究の将来の展望については，橋本が「個々の行為者の経験」がいかに「観光の現実」という全体像に連接するかを強調しているが，「ひとつの観光現

場に関与するモノ・ヒト・コトなどを含むすべての行為者それぞれが想い描く観光イメージが相互にぶつかりあい，観光しあう『観光の現実』を，『行為者レベルの連接』」（橋本 2013：23）に焦点を当てている。すなわち，「経験」と「現実」を考察する手がかりはやはり，「観光イメージ」にあるとのことである。

この流れの中，1.1 の終わりで述べたように，「モノ」を主な考察対象とする観光研究における論述は，ほぼ「みやげもの（souvenir）研究」に集中している。たとえば，ネルソン・グレイバーンは，観光で手に入れるみやげものを，巡礼の長く辛い旅を経験して獲得する「聖杯」となぞらえる。（Graburn 1997: 28）ベヴァリ・ゴードンは 1986 年にみやげものを五分類し，みやげものを「リマインダー（思い出喚起物）」と呼び，聖なる旅の思い出となる経験を具体化するものとし，みやげもの研究に聖俗分離の構造分析を持ち込む。（Gordon 1986: 135）みやげものはこういう文脈では，その土地と恣意的に，或いは強制的に結び付けられるものと認識される。また，「真正性」という観点からみやげものをみる研究としては，マッカネルとコーエンが引用される。彼らは，みやげものから観光そのものまでの「真正性」を社会的に構築される概念と主張し，観光者によっても創造されているという。（Cohen 1988: 65）以上の研究はいずれもモノを意識と対立し，人間の意識の操作対象として扱っている。

以上で整理した先行研究はモノより，人間によって取捨選択されるものとしてのイメージを重視しており，その中において，自然/文化・人間という対立する主客関係が明らかになっている。

このような従来の視点乗り越えようと，アーリは，観光にみる現代人の流動性から，場所が次々に形を変えて消費・生産されるとともに，観光者のフローが世界中の社会をつなげるという「動く文化」（アーリ 2003：xiii）に注目した。この事態において，一連の規律，手続き，基準の確立が前提となっており，観光がそれぞれの場所に自らの可能性（アーリ 2003：x）を測定し，評価し，引き出すことができるという意味で，「ツーリズムの再帰性[3]」と見ることができると指摘されている。観光研究においては，観光化やグローバル化の波の中で，観光者やプランナーなどの外部アクターのまなざしを浴びながら，自らの「真正性/正統性」を再帰的に模索し提示し始めているプロセスについて，「再帰性」に関する研究は多く出ている。アーリはこの「再帰性」の視点は，観光研究の考察の中心を「まなざし」から観光における消費の対象である「場所」に移行させようとしている。しかしアーリは依然として観光消費を視覚中心のものと見ており，観光の「諸手続きは，とくにグローバルなテレビジョンやインターネットを通して，新しいとか異なっているとか，再パッケージされているとかニッチ依存型といった場所，さらにそういった場所にふさわしいイメージを『発見』し，生み出し，市場化し，循環させる」と述べている（アーリ 2003：xi）。すなわち，結局アーリの試みは，「イメージ」という表象の問題でしかなく，従来の枠を超えることができなかったのである。

にもかかわらず，アーリは場所とインターネットなどのモノへの注目の重要性を指摘し，こ

れらのモノはこれからの観光研究では避けて通らなければならない重要な問題としている。また，アーリは明言していないが，インターネットのグローバルな普及によって，双方向的な情報コミュニケーション革命が発生し，現在の観光者は受動的な客体であるだけではなく，恣意的な実践によって観光の場所に変容をもたらす主体ともなりうる事態が起こっている。この中で，若い世代を中心に，旅行者自身が文化資源を生み出し，それを共有していく形で観光活動が広がるという，従来の枠組みでは説明しがたい事例が現れている（山村 2009：4）。さらに，1.1 で触れた人類学における全体論に関する議論の中で，ジョージ・マーカス（George　E. Marcus）は 1980 年代以降の発展を再評価し，構成されたモノの中の不確定な境界における公共性という論点は，インターネットによるコミュニケーションの出現によって生み出されたという（マーカス 2010：37）。彼は，未知で不確実なホーリズム（holism）は，インターネットにおけるコミュニケーションによって動かされ，したがって人類学における全体論の問題も表象の領域から，コミュニケーションのマネジメントの領域に移行されると断言している。人類学的な関心もインターネットの出現によって，イメージなどの表象の問題から，モノへと移行しつづけるとのことである。

このように，観光者の実践や，インターネットを含むモノの動きや不確定な変容といった現象は，今までの観光研究では殆ど考慮に入れられてこなかった。それらの現象を考察するには，新たな理論的な枠組みが必要となる。筆者もこれまで観光について研究する際，グローバリゼーションの下での観光の目的地についてのイメージという意味での地域イメージ（「destination image」）を中心として考察してきた。しかし研究を進める中で，イメージは観光という実践の唯一の決定要因ではないうえ，流動性と多層性を持ち，けっして固定のものではないことを発見した。そして最も重要なのは，インターネットを初めとする電子メディアやマス・メディアによって大量なイメージが制作され，流通している現実と，個人個人の観光者も地域イメージの制作・伝達に加わり，アクターとして働いている新現象といった，今までの「イメージ論」ではとらえきれない観光の実践が現に行なわれているということである。

よってこれからの観光研究では，観光における動的なネットワークとそれを形成するさまざまアクターへのアクター・ネットワーク論的なアプローチが要請されると考えられる。

2　アクター・ネットワーク論とは

従来の社会科学によって作られた「社会的表象だけの世界に囚われている自分たちを発見するのがもう耐えられない」という発想から，アクター・ネットワーク論（ANT）の創始者のラトゥールなどは，「モノが引き起こす現象ではなく，モノそのものに触れたい」と述べた（ラトゥール 2008）。モノを重視するといっても，それはモノの本質を解き明かす意味ではない。「アクター・ネットワーク論」は，いままさに進行中の不確定な実存からの出発，そして関係から

の出発によって，主体と客体，人間とモノ，物質と精神といった絶対的な二分化を退ける。

アクター･ネットワーク論は，関係の生成[4]変化に注目し，ヒト，モノ等の諸断片的な要素を，諸関係を構成する「対称的」なアクターと見て，それらのアクターが織りなすネットワークの動態のプロセスを把握しようとする研究枠組みで，最初は科学技術を研究対象にしていたが，次第に人類学・社会学に浸透してきた。アクター・ネットワーク論は，ヒトとモノの相互作用を対称的に扱う「対称性原理」(principle of symmetry)を一番重要な論点としている(Oppenheim 2007)。また，アクターとネットワークは不可分であり，ヒトやモノといったアクターもそれぞれ自体がアクター･ネットワークを構成する一部として働いている。関係の結び様が変われば，実在は性質を変えて消えたり，別の実在になったり，新しい実在に取って変わるのである。即ち，アクター・ネットワーク論のイメージの中において，認識，関係と存在は既に区別できない状態にある。さらに，人間以外のモノや人工物を同等な要素として議論に組み入れ，実在は関係においてのみ成り立つという主張は，現実を漠然とした実在より，関係の生成変化に等しいものと見ている。

アクター・ネットワーク論は，関係論的な観点からのアプローチであり，人またはモノだけに還元するアプローチとは異なった視角を可能にしている。そのため，これまでのある組織の中での新しい技術の開発や知識の蓄積を議論してきた研究とは異なるような，人とモノといったアクターからなるネットワークの生成と変化のプロセスに焦点を当てた仮説を立てることが可能になる。

3　観光研究におけるアクター・ネットワーク論的アプローチの必然性，問題点および可能性

3.1　観光研究におけるアクター・ネットワーク論の応用の必然性

1.1 で指摘したように，従来の観光研究においては，全体論的な視点と，モノのエージェンシーについての考察が明らかに不足している。この面では，アクター・ネットワーク論のもつ全体論的な議論と，モノへの関心の可能性が期待されている。まずは，モノの面から見てみよう。

3.1.1　モノと「物質性」への注目

1.1 と 1.2 において整理したように，アーリが提起する観光における「場所－イメージ」という研究単位（アーリ 2003：349）は，アクター･ネットワーク論ではすでに自明なことであり，場所とイメージの相互転換といった動きも，もともと存在しないことになるのである。とくに，アクター・ネットワーク論の方法論と存在論に通底する倫理性は，人間とモノ（生物，自然など）との共生といった従来のエコロジカルな倫理ではなく，自然社会といった実態，サイボークというイメージ，「擬似物体」としてのモンスター（テクノサイエンス）との関係倫理である

がゆえに，イメージと場所，モノを関係的に捉えることができるようになると指摘されている（足立 2009：15）。

このような関係倫理は，ポスト構造主義的な記号論の姿勢からきたものである（Law 2002）。記号論は，伝統的なソシュールの言語学的研究において，ある言葉が，それが属するシステムや構造の中の他の言葉との関係性に依存しているという現象の重要性を主張している。アクター・ネットワーク論は，記号論に含まれる関係性に焦点を当て，一種の「物質性の記号論」（*semiotics of materiality*）として理解できる（Law 1999: 4）。そこで，社会は「異種混交的な物質の類型的なネットワーク」（patterned networks of heterogeneous materials）（Law 1992: 2）として扱われるようになる。アクター・ネットワーク論によれば，社会的関係の持続の先決条件は，社会的な相互作用を生成･継続させるモノや物質（*things and materials*）[5] にある（Callon and Latour 1981）。よって，観光を含むいかなる社会現象も，人間社会の物質から切り離すことができない。このような，関係的な物質性に，前に述べた対称性原理を加え，アクター･ネットワーク論は自然／社会，主体／客体，観光で言えばホスト／ゲストといった近代的な存在論における二元論を退けること，あるいは迂回することを目指している（Johanneson 2005: 138）。このように，アクター・ネットワーク論はモノの表象的な意味ではなく，物質性に着目する方法論を提供している。

さらに，アクター・ネットワーク論という研究モデルの方法論的原則は，「アクターを追う」（follow the actors）（ラトゥール 2005：68）ことであるので，観光におけるインターネットや SNS といった電子メディア，そしてアクターとして観光そのものや地域に働きかける観光者といったアクターによって実在が生み出される過程を記す，観光研究においては今までにない発見的な視点である。

Johannesson は，以下の二つの理由に基づき，アクター・ネットワーク論はエスノメソドロジー的な方法論として，観光開発の研究においてとても有効であると主張している。まずは上で論じてきたように，社会的な世界の関係的な物質性（relational materiality）を研究することが可能になる。次は，アクター・ネットワーク論は複数の関係的な指示（multiple relational orderings）を解明することで，観光地/観光の場所の空間性（spatiality）の多様な形についての分析を可能にしてくれる（Johanneson 2005: 133）。アクター・ネットワーク論における空間性とは如何なるもので，それをどのように観光研究に応用できるかについては，次節で見てみよう。

3.1.2　観光の場所における「全体」を多元的な空間性で把握する

アクター･ネットワーク論を応用するとき，「場所」（place）と場所の「空間性」（spatiality）を基本的な視差として据えるべきだという主張が多い。心理学者のガーゲンは，物事を関係論的に記述する際に，「場所とりの論理」（logic of placeholders）が発見的な方法となっているという。ガーゲンによると，人間という存在が名前（言語）によって表現されたとき，言語によ

る断絶の意味はすでにその表現に含まれており，その断絶を乗り越えるために，個々の存在が関係の生成物（emergents）として理解できるような場所を確保しなければならない。その場所取りの論理によって，存在の名前（言語）は，名前自体に先行する，関係的な過程の中で創造された構造として認識できる。すなわち，場所を確保することによって，関係的な過程の副産物としての「複数の物質的な実体」（physical entities）を理解することができるという。このように，モノや物質性を理解する先決条件として，場所という概念が打ち出されているのである。

また，近年の観光研究の分野では，実践（practice）あるいは行為（performance）への視点を提唱する研究が多く現れ，いわゆる「行為への転換」（performance-turn）が見られるのである（e.g. Sheller and Urry 2004）。観光研究におけるこの転回転換は，静態的なネットワークや視覚的なまなざしといったような，単一的な次元の記述から研究の焦点をずらそうとしている。この発展もある意味で，観光者とホスト，あるいは消費者と生産者という二分法を越える試みとしてみることができる。すなわち，観光を記号の視覚的な消費やイメージや，あるいは地理的な容器や境界付けられた場所に還元せずに，観光の流動性と多次元性（fluidity and multidimensionality）を捉える模索である。この観点からみれば，観光はもはや単一的な現象としては捉えきれられない。観光は，グローバルで文化的な経済の一部と，「場所を物質的な自然，社会的な関係および推論的な概念を生産する」複雑な過程（Baerenholdt et al. 2004: 79）として見られはじめている。したがって，観光は多様な移動性と空間性を備えている。特に観光は，異種のネットワークの中の複数の流動性と出来事を含むような場所における実践と見られているため，異なる種類の空間性に依存しているといえる。Crouch（2002）は，観光における空間の主な特徴が，物質的および比喩的なところにあり，観光における複雑な記号的な過程は，観光および観光地の意味を生産すると論じている。また，観光ネットワーク（tourism networks）は，複数の単次元の時間 ── 空間（one dimensional time-space）の固定された中心点の間の関係からなるとみなされる（Johanneson 2005: 135）。これらのネットワークは地域的なもので，異質的なアクターの物質的な近接に基づくものとして描かれている（Baerenholdt et al. 2004: 79）。

場所の空間性への考察にアクター・ネットワーク論を援用し，観光にも触れたオッペンハイムは，その著書の *Kyongju Things-Assembling Place* において，韓国の慶州を一つの場所として考察した。オッペンハイムは，場所は存在，実践或いは効果に関してあらゆる空間的な次元の性質を持っているが，それは実践を通して構成されるものだと論証した（Oppenheim 2008: 12）。

観光研究における視覚中心の議論とひきかえ，オッペンハイムは単なる「視覚」（vision）ではなく，移動する光や立脚地といった，視覚のあらゆる物質的な側面を考察の対象とする。彼は，南山という観光地を，「『言葉』（words）だけでなくモノの物質的な側面の集まり」（Oppenheim 2008: 115）として見ようとしている。すなわち，モノの物質性，関係性およびモノの動く過程を含めて問題視する立場である。オッペンハイムは以下の事例をあげている。彼は南山で

のフィールドワークの中で，南山のローカルな宗教団体「仏陀村」の会員にであった。その会員はある破損した石の表面にある，あまり見えない仏像を指差し，それがごく最近，ローカルな歴史学者の Song Chae-jung が発見したものだと説明する。歴史学者の Song さんは，南山の道をよく歩いていた。ある日の昼過ぎの 4 時頃の「その瞬間」（at *that* moment），「その低角度」（in *that* low-angled）の光の中，Song は見たことのないものを見つけた。この「偶然」な発見は，また南山という全体性（holism）を立証するものとなるとオッペンハイムは強調している。さらに，視覚，啓発，光の物質性といった要素のエージェンシーの関係性は，全体として総合的に考えるべきだと論述した（Oppenheim 2008: 115, 129）。

この流れの中で，場所の過程的，あるいは相互関連的な性質と，その性質が観光者の実践によって観光ネットワークの空間において作られる過程が強調されている。したがって観光は，異なる種類のネットワークから生成し，複数の移動性を伴うという，地域における実践として見られはじめている。同時に，場所が形作られる制限も指摘されている（Coleman and Crang 2002）。Baerenholdt は，場所の固定性（solidity of place）についてこう指摘した。

> 観光地は，観光者の行為の舞台だけではあるまい。観光にとって，場所の物質的な性質と固定性は紛れもなく肝心なのである…観光者は，場所の物質的な固定性と連動しなければならない…よって，観光者が場所を消費することは，縺れ合う場所の物質的，社会的および文化的な構造の複雑性をネットワークによってリンクさせる一種の方式である。（Baerenholdt et al. 2004: 31　筆者訳）

言い換えれば，観光の場所は，異なる移動性によって安定化（stabilize）・固定化されてもいるのである。この移動性は，人，金，情報，イメージとブランドといった異種の要素からなり（Sheller and Urry 2004），アクターのネットワークを通じて，随時作られ，安定化されてゆく。よって観光地は他の場所と同じく，流動的な配置（mobile arrangements）であり，人間と非人間のネットワークの中を回り，それらのエージェントの指示の効果として理解できる（Hetherington. K. 1997: 191）。

アクター・ネットワーク論は，主体／客体やホスト／ゲスト，部分／全体といったような二分法を退け，アクターとネットワークを分けて見るのではなく，移ろいやすいものではあるが，全体として捉え直そうとしている。Law は，このような全体論的な観点を，「安定性」と定義している。彼は，ネットワークの中の諸要素／アクターは，それらが連鎖や関係性の中における位置によって，自らの空間的な完全性（spatial integrity）を獲得すると見ている（Law 1999：6）。そのような完全性は，連鎖の形状の安定性を維持しており，鉄道ネットワークやソーシャルネットワーク，無論観光ネットワーク等，複数として地域をなり立てているという（Law 1999：7）。そして，複数のネットワークと地域との関わりあいの中で，人々の実践が生ま

れていく。

また，アクター・ネットワーク論に近い論者のストラザーンは，部分・全体関係でなく，部分と部分の関係における全体のアナロジカルな展開に基づいた，比較を対象自体より見出すという，「部分的連接（partial connections）」（Strathern, M. 2004）方法を見出した。アクター・ネットワークと共通するところの多いこの比較法は，従来の比較法が前提とする，部分が一つの全体を構成しシステムの一部をなすという認識を批判している。そのような部分／全体の一体が個別に並んで関係づけを待つ見方ではなく，全体がみえない部分が別の同類の部分と関係を形成し合い，その関係によって全体の在り方をあたらしくイメージさせていく（春日 2011：12）という観点である。橋本は，この「部分的連接」モデルに従って，「部分」ともいえる個々人の観光経験がいかに「全体像」となる「観光の現実」に「連接」するのかについての研究が不可欠であると提唱している（橋本 2012：21）。

このように，アクター・ネットワーク論における全体論的な思考は，純粋で同一的な全体をとらえる考えではなく，異種のアクターの活動と，活動の中におけるネットワークの生成を対称的にかつ詳細に記述することによって，存在をとらえ直すものである。このような全体論的な分析作業によって，一つの原因からおこった部分的な現象や，部分の単純な結合の「全体像」ではなく，アクター・ネットワーク全体の安定化のメカニズムを示すができるわけである。

以上の先行研究を踏まえ，アクターの実践によって現実が生み出される過程を記述し，場所における多元的な関係性に注目するコンセプトを観光研究に応用することで，観光地を全体として捉えることもできるようになり，観光地におけるさまざまな事象に対する新たな発見ができると筆者は考えている。

3.2　観光研究におけるアクター・ネットワーク論的アプローチの先行研究と問題点

観光研究においてアクター•ネットワーク論的アプローチをとる事例分析は非常に少ないが，3.1 で触れたように，アクター•ネットワーク論に基づく研究の可能性と展望に関する論述が近年出ている（Johanneson 2005; Moore Susan, Newsome David 2009; Ren Pritchard & Morgan, 2010; Ren 2011; van der Duim 2007; van der Duim & Ren 2012）。それらの研究は主に van der Duim（2007：962）の指摘通り，対称性原理（principle of symmetry），アクターを追うことと，「翻訳」（translation）の過程に焦点を据えることという三点において，アクター•ネットワーク論は観光研究に役立つであろうと論じている。対称性原理は上に述べたように，モノも人間と同じように扱うよう促す論点であり，記号の恣意性に疑義を呈する上，モノの物質性を射程に入れようとしている。その上で，ヒトやモノといったアクターがネットワークを構成していくプロセスを注目し，それぞれのアクターを追うという方法論に導くことになる。このとき，アクターらが相互行為の上でネットワークを構成し，相互的に組織（organize）する過程は「翻訳」（Callon 1986: 226）と呼ばれる。アクター・ネットワーク論はいわゆる社会理論より，人間と

モノという異種混交のアクターが連鎖することで生成する一時的かつ可変的な「アクター自体の世界構築活動（actor's own world building activities）（Latour 1999: 21）」を探求する方法論として使われている。その際，個々のアクターを安定した要素とは考えず，常に自分自身を変化させ，相互関係を再定義し，新しいアクターを動員しながらダイナミックに機能するものとして捉え，アクターは他のアクターを巻き込めば巻き込むほど強力となり，「アクター自体の世界」（actor's own world）も安定化するものと考えられている。そしてアクター・ネットワーク論では，この諸アクター間をつないだり，アクターの実践・行為を規定したりする動的過程を，「翻訳」の概念で記述している。

言い換えれば，翻訳とは，特定のアクターが他のアクターの特性や意図を自らに都合の良いように読み替えて，それらを「動員」することである。極端に言えば，翻訳とは，二つの異なるものを同等のものにする過程であり，働きである（Law 1999: 8）。カロンの論では，動員されるアクターは抵抗や反逆，そして自らのネットワークへの再「翻訳」が可能であり，その結果としてネットワークの可逆的で不安定である点が強調される。このとき，ある現実や実践は一つの存在として成り立っているのではなく，さまざまなアクターが翻訳という過程によって構成される相互行為のネットワーク，あるいは「アッサンブラージュ」（Latour 2005）として分析すべきだとされている。デンマークの観光研究者の Johannesson は，「翻訳」という分析概念に内在する力は，異なるアクターによるネットワークにおける実践に光を当てることで，社会的な世界の関係的なモノや「物質性」（materiality）を研究することが可能になると述べている。以下はまず，アクターの翻訳過程に注目する観光の事例研究を見てみよう。

3.2.1　翻訳過程を辿る

3.2.1.1　翻訳過程と「地域，ネットワーク，流動体，火」

アクター・ネットワーク論を参照し，観光と観光にかかわるアクター間の相互作用に注目する事例研究として，アンドレア（アンドレア 2013：81〜93）の「死者へ接続するツアー ── 現代京都におけるダークツーリズムの再考」が挙げられる。この論文は，京都怪談夜バスツアーにおける体験の関係性に注目し，それがさまざまなアクターたちの相互作用によって戦略的に構築されることを論じた。ツアーを構成するさまざまなアクター（提供者，ガイド，バス，音楽，怪談，塩など）によって参加者たちの体験は段階的に方向付けられることを提示した点で，アンドレアの論文は観光研究において斬新である。他方で，心霊スポットでの参加者の体験を理解するため，さまざまなアクターが行う翻訳過程によって心霊スポットがネットワークとして構築されることが注目され，翻訳過程が行なわれる回数に従って，そのネットワークがさらに強くなり，現実化されることも焦点化された。最後に，モノのネットワークによって死についての記憶がアクターとして構築されると論じられた。

アンドレアはこの論文で，観光地がアクターの翻訳過程を通じて，ネットワークとして構築される力学を記した。しかしながら，アンドレアの関心は依然として「フィールドワークによっ

て収集したエスノグラフィックなデータに基づき，供給と需要間の相互作用」（アンドレア 2013：83）にあり，モノはここで人間によって「戦略的」に利用される一方で，モノのエージェンシーへの注目は皆無といっていい。

アクター-ネットワーク論から見れば，あらゆるアクターはハイブリッドで，エージェンシーでもあり，ネットワークの中で他のアクターとの関係を紡いでいくのである。このエージェンシーは「人間と非人間の行為の集合的な能力をあらわしている」（Cloke and Jones 2004: 193）。これは，異種混交な成果である。アンドレアのように，あらかじめ観光の供給側や需要側を設定しその力学を分析するより，いわゆる「翻訳」は，コミュニケーションを成立させる，もしくは連結を作る過程（Brown 2002: 5）としてみることがより適切であろう。翻訳なら，その過程には翻訳されるものと翻訳者，および媒体（medium）の三角関係が存在する。そして翻訳自体は，物質的な中間媒介物（material intermediaries）に依存しており，Johannesson はこれを「メッセージ」とみている。Law は，翻訳に内在する意味に注目し，「翻訳は動詞であり，変換と等価性の可能性を含めている。翻訳は，あるもの（たとえばアクター）が他のもの（たとえばネットワーク）を表す可能性でもある」と述べ，重要な点は，モノが翻訳されるときに，必ずある程度変換されたことであり，翻訳はこの意味でいつも裏切りとなるという（Law 1997）。従って，翻訳されたアクターは元のものやそれ以上のものではなく，元のものと同様でありながら，違ったものである。あらゆる交流は翻訳である以上，その過程はわれわれの生活に内在している（Johannesson 2005: 140）。

この観点でみると，「需要側」とみなされてきた観光者は，異なる時空間において，翻訳者であるとともに翻訳される対象として認識できる。観光者は，観光実践を通して観光地を翻訳している。たとえば，写真の撮影や土産物の購入といった実践は，場所を観光者のネットワークに翻訳し，ネットワーク間の交流を建設・規定する。ここで写真や土産物は，場所の翻訳過程における仲介媒介物となる。佐藤善之（2010：115）は，アニメやゲームのイラストが描かれた絵馬を含む「オタク関係」の文言が書かれた「オタク絵馬」と，アニメやゲームの「聖地巡礼」と呼ばれる観光行動との深い結びつきを考察した。このような，聖地におけるオタク絵馬は，神仏への祈願のシンボルであると同時に，キャラクターのシンボルでもある。想像の向こう側にある聖地を現実の場へと重ね合わせるために奉納されているのであり，こうして生まれた聖地は他者との共有が可能になるという。結果として巡礼者たちはキャラクターを介した想像上のコミュニケーション空間を，現実の場において手にする。このように，オタク絵馬により，キャラクターと観察者，そしてキャラクターの場へと降り立った奉納者によるコミュニケーションの空間が形成されていくと述べられている（佐藤 2010：126）。

佐藤が論じた「オタク絵馬」はまさに，オタク巡礼者たちが現実の観光地をヴァーチャル空間（佐藤の言葉を使えば想像上のコミュニケーションになる）に翻訳する仲介媒介物として働いている。インターネットをはじめとするメディア発展によって，観光地をヴァーチャルな場

所へと翻訳するという観光者の実践はますます活況を示している。中国人の北海道観光の場合，若い観光者はほとんど自らの観光実践を中国版ツイッターの weibo に発信するという翻訳を行なっている。次々と来道する中国人観光者は，またこの weibo における北海道のシミュラークルを媒介とし，現実の北海道を翻訳してゆくのである。ここの weibo における北海道に関するメッセージはまさに仲介媒介物であり，その物質性（短い文字数の制限，写真の配置など）が，中国人の観光というネットワークにおいて重要なアクターとして働いているのである。というのは，weibo における発言は，140 文字というかなり厳しい文字数の制限がかけられている。それは，文字数が多ければ多いほど，それを見る人の関心が失われていくと予想されているためである。なるべく簡潔な文章に，より興味をそそるような写真がつけられる発言は好ましいのである。このため，複雑なストーリー（アイヌの歴史や科学館の展示についての説明）より，一目瞭然な綺麗な自然風景と食欲をそそる食事の写真，さらには中国と異なる日本の風習がより関心を引くものとなっている。

一方，観光プロモーターや観光地で暮らす人々も観光者を翻訳する。顕著な例として，観光者は人数や経済的な成功や失敗に翻訳される。これは，翻訳過程が一種の「相互規定と記述」（Callon 1991: 143）であるという現実を示してくれる。北海道の観光業界を例とすると，中国人観光者は人数や経済効果で計られると同時に，台湾，香港，本土（沿岸部大都会と内陸部，南部と北部など）からの観光者それぞれに対して，異なる対応を行なうという「エスニック分業」も実施されているのである。

この翻訳概念は，観光のネットワークにおける不確定な，「アッサンブラージュ」の作業（work）（Johannesson 2005: 140）に着目しているものである。Johannesson は，アイスランドの Pingeyri 村の観光プロジェクト「目的地ヴァイキングプロジェクト」（Destination　Viking Project）における翻訳過程を記した。この翻訳過程では，物質は集合的な物質的な実践として，地域住民の実践と連動し，観光発展と地域社会とかかわる有意義な語りと人工物を生産したという（Johannesson 2005: 144）。地域住民の実践過程はここで，プロジェクトの物質化であり，指示と空間性の諸類型の間における干渉とかかわりあっている。最後に，Johannesson は，矛盾で複数として存在する指示に関するアクター・ネットワーク論の近年の論述を取り入れた。それは，Law と Mol（2001）が提示した「地域，ネットワーク，流動体，火」（regions, networks, fluids and fire）という四種類の場所である。これらの場所の空間的な次元は，関係性においてあらゆるアクターと実践を規定することができるという（Johannesson 2005: 142）。

近年，アクター・ネットワーク論は見事に普及しているとはいえ，科学技術や経済モデルなどの限定された領域にとどまる傾向がまだ続いている。宮武はアクター・ネットワーク論について，人とモノの織りなす過渡的な生成のプロセスを理解する上でそれは有効だが，ヒトとモノを極端に対称化したネットワークを想定し，分析対象が拡散してしまうという限界を持つと指摘している（宮武　2007）。この指摘のように，観光には，地域のさまざまな観光資源とみな

されたもの，観光プロモーター，観光者，旅行会社，地域住民，役所，さらにはインターネット，SNS，人間の五感，観光者の出身地などなど，数え切れない人とモノが関与している。その中でいかに考察の対象を絞り，より有効的にアクター・ネットワーク論を応用するかは解決すべき課題となる。

分析対象の拡散のほかに，科学技術を対象にしていたアクター・ネットワーク論は，人の側のさまざまな襞や深みをあまり問題にしてこなかった点と，地域における出来事や事象を，人，モノ，言葉（記号）のネットワークの動態を対象とするには，十分な分析概念を必ずしも備えていないことが指摘されている。従来観光研究のなかにもともと存在している「地域イメージ」という分析概念は，観光研究へのアクター・ネットワーク論的アプローチの中に新たなボキャブラリーとして付け加えるべきものであると，筆者は考えている。同時に，異種の空間的指示と絡み合う翻訳過程を通じて生成する観光現象における空間性は，以上の地域，ネットワーク，流動体，火という四つの場所の隠喩を利用すれば，より繊細な研究を展開することができよう。

Johannesson は，アイスランドの Pingeyri 村の観光プロジェクトにおける「地域」を，関係的に移動的な場所として考察し，地域が観光プロジェクトのネットワーク空間に参入することで，その性質や光景が変わったという（Johannesson 2005: 145）。よって観光プロジェクトは永遠に移動するもので，地理的な空間で移動するが，ネットワークの空間でその形状を保っている。同時に，観光プロジェクトにおけるヴァイキングの性質は非常に（液体のように）流動的なもので，異なる表象/バージョンとして現れてくる。言い換えれば，このヴァイキングプロジェクトのイメージは，地域内のところどころによって類似的かつ違う方式で行なわれている。よって観光プロジェクトの流動性は，その変身する性質に依存しており，プロジェクトをみるさまざまな方法の可能性を提供してくれるとされる（Johannesson 2005: 146）。この可能性が空間を通してプロジェクトを動かす過程は，アイディアから実践への，地域と流動の空間との干渉から生成する翻訳であるという。

Law と Mol（2001）の最後の隠喩は火である。火は基本的に「不連続性の効果としての形状の継続性」（the continuity of shape as an effect of discontinuity, Law and Mol 2001: 615）を指しており，不変性は突然で不連続的な運動の中で成し遂げられるものだと述べている。従って形状の不変性は，現存と不在の関係によって形成され，「現存するモノの不変性は，その時に不在しているものや，モノの他の状態によって決められている」（Law and Mol 2001: 616）である。火の隠喩は，観光や観光地の生産と消費を研究する際，想像と記憶を考慮に入れる可能性を開いてくれるという（Johannesson 2005: 146）。観光の現存は大きな意味で，場所における以前のアクターの不在，言い換えれば，今は不在しているが，以前の活動のエージェンシーによって現在の場所に働きかけるアクターに基づいている。Baerenholdtt は，博物館や，度々の観光者の訪れで生き続ける観光地は，大多数の場合不在の時空間によって作られ，今の時代もその不在に依存していると指摘する（Baerenholdt et al. 2004: 79）。歴史遺産に基づく観光プロジェク

トもいろんな意味で,「火の空間性」, つまり継続性を指示する実践に依存していると Johannesson は述べている（Johannesson 2005: 146)。

Johannesson の考察は，主に地域住民が観光開発に参加する実践における翻訳過程に関するものであり，地域，ネットワーク，流動体，火といった隠喩の応用は少なく，紹介程度にとどまっているといえる。なお，観光者の実践における翻訳過程，地域イメージの共有化における火の空間性については触れていない。ただ，3.1 で引用した *Kyongju Things-Assembling Place* においても，ローカル・ナショナルなアクターのエージェンシーおよびその相互作為の中で生成する地域が描かれているが，外国からの観光者についての論述は見られないうえ，彼らのインターネット利用やヴァーチャル空間における南山や慶州についての論述も皆無であった。

観光の現場では，観光者の個々人がさまざまな実践の可能性を任意的に組み合わせ，自らの観光ルートに導いてゆく実践が行なわれているのである。実際，観光地としての地域が予想する観光者の実践と，実際の実践との間にずれ・齟齬が生じている。それは，観光の提供者であるアクター側の予想と，観光者の実践のパターンは，逆転したプロセスによって導かれているからである。前者の予想は原因論的な発想で, 地域の今までの観光資源とみなされたもの（something）を観光者に提供する。それに対して後者は，地域の全てのものやイメージ，および観光の中で経験するあらゆるもの（anything）を用いて，自分なりの新たな実践を「制作」しようという実践である。これら二つのプロセスは逆転しているのである。そしていずれも地域イメージが媒介のアクターとして介在している。観光者の実践は，あるひとつの，あるいは一群のアクターの働きに還元できない複雑なものになっている。ここで重要なのは，観光者と特定の，観光資源とみなされているモノだけの関係ではないのである。実践に巻き込まれ干渉する，さまざまなモノとの媒介過程を経て，特定のモノとして，観光者などのアクターが意図的に特定のアクター・ネットワークとしての装置に入ることで焦点化されている。つまり，思わぬ出会いがランダムなつながりを生み出し，従来の観光研究に回収されない，多様性と差異に開かれた，複数の観光実践が展開されていくのである。

このように，観光者によるひとつの実践が果たされる瞬間に，それにまつわるネットワークが新しく生成され，そこから地域の流動的な性質が現れる。観光におけるさまざまなアクターは，地域の中で運動できるのは，形状を変えながらも，流動的な空間において自己の継続性を保っているのである。地域イメージで説明すれば，観光者も地域も地域イメージをアクターとして動員し，イメージから実践へと翻訳しゆくが，結果として異なるネットワークが生成する現状が頻繁に見受けられる。観光者による新たな実践は，個別の実践であり，その実践はいろいろなアクターを動員し，果たされる瞬間には新しいネットワークができるようになる。

3.2.1.2　観光における個的実践の共有化

従来の観光研究では，このような個的な実践はほとんど，マス・メディアや旅行業者の影響

を強く受け，可変性は非常に限られたものとみなされ，実践自体の影響力や浸透力はあまり存在しないとされてきた。21 世紀に入り，観光者の観光経験を重視し（橋本 2011），観光者が観光地のイメージに微細な変化を加えると主張する研究（遠藤 2001）が行なわれるようになり，特に前者の橋本和也はアクター・ネットワーク論に関心を持つようになり，地域イメージに関しては，アクターそれぞれが持つイメージが相互に干渉し合うという連接を求めるべきだという関係論的な関心を提唱するようになった（橋本 2013）。しかしこれらの最新の研究はいずれも，観光の実践とイメージ，すなわち物質と意識，自然と文化という従来の枠組みを越えることがなく，アクター・ネットワーク論をはじめとする人類学における存在論的な探求を応用できるとは言いがたい。

そこで，「アクターそれぞれが持つイメージ」の相互関係より，アクターそれぞれの実践にまつわる観光ネットワークがいかなる様相を呈するのかを見てみると，この中では，以前の観光者は，すでに物理的な観光地の空間には「不在」しているし，彼らによる過去の実践も不在している。しかし，彼らの実践とそれに基づいて制作される地域イメージが，新たに行われる観光実践の中で翻訳・共有され，実践に導かれる一連のプロセスが循環するのである。したがって新しく生成する地域イメージには，「不在」しているが継続的に働く過去のイメージが散りばめられているといえる。これはまさに継続性ともいえる，地域における「火」の空間性である。

更に，この「火」の空間性において大きな力を発揮するアクターとして，電子メディアという人工物に目を配らなくてはならない。電子メディアはここで，アクターであると同時に強力なネットワークである。インターネットのグローバルな普及によって，双方向性の情報コミュニケーション革命が発生し，観光者は受動的な客体ではなく，インターネットを利用し，観光実践における地域を「制作」・伝達・受容し，新たな実践のネットワークに導いていくアクターともなっている。まず，インターネット上で伝わる観光実践によって新たな観光者が生み出される。従来は，ガイドブックやパンフレットが観光者を誘致する媒介であったものが，現在ではブログや SNS によるインターネットにおける観光者の観光実践に関する「口コミ」・イメージが観光者を生み出す主因となっている。次は，インターネットを通して観光者の意見が地域に届くようになる。インターネットを介し，観光者と地域が直接に意見交換することが可能になる。観光者の観光実践や，観光者によって新たに作り上げられる地域イメージが，地域に反映されるようになっている。したがって，観光者の実践が，地域の観光開発につながっていく事例も少なくない。

ここで注目すべきなのは，「地域」というものを流動的な空間かつ共通言語として，インターネット上のコミュニケーションは，地域において実際の場所でのコミュニケーションへと展開させる大きな原動力となったことである。この中において，様々なアクターがネットワークで接点を持ち，互いに関係を構築する中で，地域と観光者の交流はより感性的なものとなり，この地域は，実在する地域としての観光地でも偽りのものでもない，「北海道」のシミュラークル

として複数で働いているので，それらの「北海道」をかぎ括弧に中に入れることで表現していきたいと考えている。そして本論は，そのありさまを明らかにし，そしてそれらの複数性を地域に帰属する特性ではなく，地域が観光の場所として生成されるパターン／フレームに帰属する特性として考察するつもりである。すなわち，観光実践におけるイメージやヒト，モノがいずれも電子メディアというグローバルな科学技術と連動して越境できるような，従来では想像もつかない膨大なネットワークとなりうる。これからの観光研究は，オンライン研究を取り入れ，ヴァーチャル空間におけるネットワーク生成の過程への注目が必要となる。

この「火」の空間性において，地域イメージは，それが共有されない場合はその存在感を薄めていくが，大いに共有されるという極端な場合，ふくらみ，浸透しあい，ブラックボックス化される現実が見受けられる。次節で見てみよう。

3.2.1.3　観光における地域イメージのブラックボックス化

足立は，アクター•ネットワーク論の延長として人の側を研究する際，人の側の情動，記憶，言語は翻訳の作業を経て，アクター・ネットワーク形成の過程の中で純化されたブラックボックスの一種と見られると述べている（足立 2009：184）。アクター•ネットワーク論でいうブラックボックスとは，人とモノのネットワークが徐々に安定化し，ほとんど意識されずに維持できるネットワークは，その形成の過程や構造が当たり前なものとして忘れ去られてしまうものを指している。このように，マクロレベルでのアクター・ネットワークの安定化が進めば自ずとアクター自身が関連の概念を翻訳することができ，それによってアクター自身が特定の動機と意図の網の目に入っていく場合がある。したがって，このブラックボックスはただ，なにか適当な原因と結果の対応として人々に理解されるようになる。そのとき，この適当にブラックボックス化されていき，比較的に確定された対応関係というものが，諸アクターにとっての事実となる。

このような見方で観光を見ていくと，観光が比較的に安定しており，地域 ── 観光者の間で確定された対応関係（観光商品の提供，観光実践への対応が予想通りにスムーズに行なわれる状況など）を伴う地域イメージを，事実として純化されたブラックボックスの一種としてとらえることができよう。無論，ある観光実践には，さまざまな地域イメージが幾重にも重なったものとしてとらえることになる。そこには，生成過程の地域イメージ（換言すればネットワーク），事実として純化されたネットワークとしてのイメージ（ブラックボックス），変容し消滅しつつある地域イメージが錯綜し，相互に入れ子構造となっているのであろう。これらのすべての地域イメージ，すなわちネットワークを追跡することは不可能である。そのため，観光の全体像と各アクターの働きおよびネットワークの状態を把握しつつ，そこにできたブラックボックスをあけ，そのネットワークのありさまを把握することが重要となる。このため，筆者は，常に目の前の事物や出来事，概念はなんらかのネットワークであることを意識しながら，

研究対象とする特定，ブラックボックス化したネットワークを抽出し，それを開けていくことが必要だと考えている。

ただ，このブラックボックス化の過程において重要な点は，地域が観光者の実践に対応することである。すなわち，観光者が地域イメージを実践に導き，新たな実践をまたオリジナルな地域イメージとして翻訳するが，一方で観光プロモーターや観光地で暮らす人々も絶えず観光者を翻訳している。後者の翻訳過程は，観光者の人数や経済的な成功や失敗についての分析として観光研究で取り上げられている。

最後に，以上の翻訳過程において，地域が「複数」のものとして生成してゆく過程が見受けられる。一見すると突飛な結論だが，次の章でアクター・ネットワーク論に依拠しながら説明したい。

3.3　観光を通じて生成する地域の複数性

以上で提示したように，アクター・ネットワークを考えるには，空間性を考慮に入れなければならない。それは，空間性は，モノの持続性を保持し，モノは空間を通して配置されるためである（Law 1999: 6）。そのような空間性は，既知のものや，固定化したものではない。その代わり，空間性は地域，ネットワーク，流動体，火といった形を成しており，さまざまなネットワークを内包している。地域を考察する場合，人々は「社会的ネットワーク」に生きており，「鉄道ネットワーク」を利用して移動し，観光のネットワークにおいてさまざまな実践を重ねてゆく。よって，地域はネットワークから構成されているといえる。地域がネットワークの中と，ネットワークとの関わりあいの中で，不整合かつ複雑で，一つの単純な空間的な形に純化できないもの（Law 1999: 7）となってゆく。それは，地域の複数性である。

アクター・ネットワーク論は，西洋近代の人文社会研究と自然科学研究では，モノ（自然）と社会のそれぞれに二重の位置を与えると批判している。言い換えれば，複数の文化と，単一的で普遍的な自然という二分法というパラダイムである。このパラダイムを図式的に考えると，まさに図 4 で提示した，近代的な観光商品が作り出される解釈なのである。これに対しラトゥールは，「近代人の歴史は非人間つまりモノの出現によって区切られることになる…原子爆弾，コンピューター，これらの非人間の一つひとつが出現するたびに，当の非人間の奇跡的な誕生を起点として，そこから新たな時代が始まったもの」（ラトゥール 2008：126）とみなしている。すなわち近代となって，世界全体のアクターの「動員量とそれぞれの共同体の動員量とは増大し続けて」（ラトゥール 2008：127）いる中で，「系統だった時間や規則正しい時間の経過を思わせるものは何一つもなく」，文化（あるいは文化的側面）だけを信奉するという排他的な執着は捨てるべきだとする。そうすることで，「値踏みができないほど高価な『複数の自然』を手に入れる」（ラトゥール 2008：179）ことができる。したがって，倍加の一途を辿っている多数のア

クターが，複数の自然，複数の社会を作り上げるネットワークで分析することが可能になる。

ラトゥールだけでなく，ヴィヴェイロス・デ・カストロもドゥルーズのリゾーム概念を引用し，複数性こそが新たな型の全体性だと定義している（宮武 2012）。社会学でも，ひとつの社会を「複数者 plurals」でとらえる動きがある。米国の学者のジョン・ダワーは，「『日本文化』や『日本の伝統』は存在しておらず，『日本』でさえ存在しない。逆に語らねばならないのは，『日本文化たち Japanese cultures』であり，『日本の伝統たち Japanese traditions』と，『日本たち Japans』なのだ」（ダワー2004：p.xvi）と述べている。すなわち，複数性を語ることのみが「日本の歴史の事実に近いし，今日の日本社会の実状にも近い」という観点で，複数性を表現すればこそ，「日本を世界のなかで比較することができ，本当に新しい，目の覚めるような日本理解が可能になる」（同上）という観点である。

アクター・ネットワーク論は，現実を複数としてみなし，それらの複数の現実を，干渉や行為の隠喩（metaphors of intervention and performance）（Mol 1999: 77）として描いている。この議論の核心は，われわれは単一の現実の側面ではなく，現実の違うバージョン（versions of the reality）を取り扱うことへの強調である。Mol　はこれらの「バージョン」について，類似であると同時に異なっており，指示に使う種々の道具でもあるという（Mol 1999: 77）（同上）。このように，筆者も新たな観光研究の視点を，複数のモノや存在を追いつつ，観光によって生み出される地域の複数性を，生成するもの（becoming）のネットワークとみなしたい。

このような複数として生み出された地域は，さまざまなヒト，モノと複数の出来事によって生成した北海道であり，アクターを追う存在論的なアプローチによってのみ捉えられる全体である。たとえば，北海道が中国人観光者の実践を翻訳し，対応してゆく過程を見ると，電子メディアによる地域情報の提供と新たなツアーの開発，さらには地域の未開拓の観光資源の発掘などといった出来事が，続々と現実のネットワークを広げていくのである。そしてこうやって時系列で北海道が生成する動態を追い，空間における運動に内在する翻訳を見つめなおし，観光実践が異種の空間性の干渉を通じて生成することの解明によって，中国人の北海道観光の特殊性およびモノの働きや，観光者の創造性を見出すことが可能になる。アクター・ネットワーク論に依拠し，地域の複数性に注目することこそ，発見型の観光研究につなげることができるのではないだろうか。

4　終わりに

本論は先行研究を踏まえ，まずは観光を強力なネットワークの集合として見なし，それに関する「厚い記述」で，強い集合体としての観光者の台頭と，それが他のアクターを支配する（翻訳する）様子を明らかにした。最新の観光研究では，アクター・ネットワーク論を応用する論著も出ているが，そのいずれも観光者の実践についてはあまり触れていない。それに対し，本

論は観光者による実践と観光商品の両者が導かれる全く逆転した過程を描く予想図を提示し，その翻訳の過程を，諸々なモノに語らせる対照的かつ詳細に記述する必要を訴えた。さらに，その観光実践における翻訳の循環の過程を通して，観光地という「場所」が媒介となって，さまざまな結びつきを生み出す中で，いろんな空間的次元において複数として生成する過程をアクター・ネットワーク論で解明する可能性を指摘した。上で述べた通り，観光実践の多様化とアクターとしてのインターネットの発達により，観光研究における地域を単一的な次元で語ることはもはやできなくなると論じた。

Law は，アクター・ネットワーク論における最も理論的かつ実践的な難題は，単一性と単一化と対抗することであると断言している（Law 1999：10）。この挑戦の流れの中，観光研究も「地域の複数性」についての記述の方向に進むであろうと考えられる。さらに，調査者による参与観察が，アクター・ネットワーク論的研究の「必須の通過点」であり，観光研究もともと実学的な性格を持つことを考慮に入れて，本論の結論を理論的な探索にとどまらず，具体的な事例研究に応用したい。つまり，観光者の実践を追いつつ，それがさまざまなモノ，人との関わりの中でネットワークを形成し，地域の複数性として働く過程を記述すれば，地域に密接な関連を持つ観光研究が生まれる可能性が高いのであろう。そしてそれを新たな観光開発につなげることこそ，観光研究におけるアクター•ネットワーク的なアプローチの意義の所在であろう。

（しゅう　ふぃふぃ・歴史地域文化学専攻）

注

[1] ここでいう「全体論」は，人類学における全体論（holism）に対する新たな批評に基づいている。Nils Bubandt と Ton Otto は『全体論における実験』（Experiments in Holism）において，全体論は，現象がより大きなコンテクストや関係のフィールド，或いは「世界」（world）の中で捉えられてはじめて，意味，機能と関連をもつものだという見方であると述べている。

[2] agency の語源はラテン語の agere（行う）であり，この語からの英語の単語の agent（行なう人），agency（行なう地位・力）などが出た。米国のポスト構造主義思想家のジュディス・バトラーは「エイジェンシー（agency）」の概念を，構造主義的な決定論から脱して，構造の変革の可能性に開かれたものとして用いていた。このような，構造の制約の中で発揮される主体性を，訳者の竹村和子は「行為体」ないし「行為性」と訳している。小田はこれに加えて「行為遂行能力」ないし「行為力」という訳語も適切だという。すなわち，既存の秩序によって説明できない新たな秩序が生成する契機は，現場に臨んだエイジェント／アクターたちによって行使される即興的かつ創造的なものだという主張である。（小田 2009：26，32）

[3] 再帰性は，ギデンズ・アンソニーやラッシュ・スコット，ベック・ウルリッヒらによって，現代社会の特徴を把握するために用いた概念である。「諸個人がみずからの行為に関する情報を，その行為の根拠について検討•評価し直すための材料として活用すること」を指し，これの諸個人への浸透が近代社会の特徴である。それによって「再帰的近代化（モダニティ）」という枠組みが提示されたのである（宮台真司，仲正昌樹 2004『日常・共同体・アイロニー　自己決定の本質と限界』双風舎）。

[4] ここの生成とは，ある人々やモノや混交物が相互に影響を及ぼし合いながら齟齬と連接を生みだし，集合や分離を次々と形成することでさらなる齟齬と連接を作りだしていく過程であると，春日は定義している（春日 2011：19）。さらに春日は，存在が関係性の不断の生成によって顕現しつづける以上，存在の分析もまたそうした関係性の一部を形成して存在へと働きかけていく行為となるはずであるとして，プラグマティックであり実践的な方向こそ新しい人類学の目指すところであると提唱している。

[5] 本論は，ラトゥールの用法に基づき，もののエージェンシー及びほかのアクターとの関係性を強調する場合に使われる thing の訳語を，「モノ」とカタカナで表記する。また，その物質的・物理的な側面を描き出す際には，「もの」と表記する。そして，物質性のみが強調される material の訳語として，「物質」という単語を使う。

参考文献

日本語

アーリ・ジョン（1995）『観光のまなざし ── 現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局
（2003）『場所を消費する』法政大学出版局。
春日直樹編（2011）『現実批判の人類学 ── 新世代のエスノグラフィへ』世界思想社。
足立明（2009）「人とモノのネットワーク ── モノを取りもどすこと」田中雅一編集『フェティシズム研究第 1 巻　フェティシズム論の系譜と展望』京都大学学術出版会。
（2001）「開発の人類学：アクター・ネットワーク論の可能性」『社会人類学年報』。
遠藤英樹（2001）「観光という「イメージの織物」── 奈良をイメージとした考察」『社会学評論』52（1）：133-143。
小田博志（2009）『「現場」のエスノグラフィー」，波平恵美子（編）『健康・医療・身体・生殖に関する医療人類学の応用学的研究』，『国立民族学博物館調査報告』85：11-34。
（2010）『エスノグラフィー入門 〈現場〉を質的研究する』春秋社。
国土交通省観光庁（2011）『観光白書（平成 22 年版）』日経印刷。
周菲菲（2012）「インターネットと北海道への中国人観光者 ── 観光研究における質的オンライン研究の応用について」，『北海道大学文学研究科研究論集』2012 年 11 月第 12 号。
「『反日感情』と北海道の地域イメージ ── 来道中国人観光者を中心に ──」，『北海道民族学』，北海道民族学会，第 9 号，pp.30-45，2012 年 4 月。
ジョン・ダワー著，三浦陽一，高杉忠明訳（2004）『敗北を抱きしめて　上　増補版　── 第二次大戦後の日本人』岩波書店。
橋本和也（2011）『観光経験の人類学 ── みやげものとガイドの「ものがたり」をめぐって』世界思想社。
（2013）「観光学の新たな展望 ── なぜ，いま「観光経験」なのか」『観光学評論』Vol. 1　No. 1。
アンドレア・デ・アントーニ（2013）「死者へ接続するツアー ── 現代京都におけるダークツーリズムの再考」『観光学評論』Vol. 1　No. 1：81〜93。
バレーン・L・スミス編集，三村浩史訳（1991）『観光・リゾート開発の人類学 ── ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応』勁草書房。
ブーアスティン D. J.　星野郁美・後藤和彦訳（1974）『幻影の時代 ── マスコミが製造する事実』東京

創元社。
フリック，ウヴェ（2011）『質的研究入門 ── 〈人間の科学〉のための方法論』小田博志監訳　春秋社。
佐藤善之（2010）「オタク絵馬とは何か ── 宮城県護国神社の絵馬調査結果とその分析」北海道大学観光学高等研究センター編集。
（2010）『次世代まちおこしとツーリズム ── 鷲宮町・幸手市に見る商店街振興の未来』。
宮台真司，仲正昌樹（2004）『日常・共同体・アイロニー　自己決定の本質と限界』双風舎。
宮武公夫（2007）「序 ── 科学技術の人類学へ向けて」『文化人類学』71/4。
（2012）「現代の人類学 ── ホーリスティックな存在の人類学へ向けて」『社会人類年報』38号：1〜32。
村上嘉代子，川村秀憲(2011)「外国人から見た日本旅行 ── 英語ブログからの観光イメージ分析」『人工知能学会誌』26 巻 3 号。
山下晋司（2009）『観光人類学の挑戦「新しい地球」の生き方』講談社選書メチエ。
山村高淑（2012）「コンテンツツーリズムをめぐる社会の動向と関連研究の今後の可能性」北海道大学観光学高等研究センター編集『観光資源としてのコンテンツを考える』CATS 叢書 Vol. 7：1〜10。
（2009)「観光革命と 21 世紀：アニメ聖地巡礼型まちづくりに見るツーリズムの現代的意義と可能性」北海道大学観光学高等研究センター•文化資源マネジメント研究チーム編集『メディアコンテンツとツーリズム：鷲宮町の経験から考える文化創造型交流の可能性』：3〜28。
ラトゥール・ブルーノ著，川崎勝・平川秀幸訳（1999）『科学が作られているとき ── 人類学的考察』産業図書。
ラトゥール・ブルーノ著，川崎勝・高田紀代志訳（2008）『虚構の「近代」── 科学人類学は警告する』新評論。

英語（アルファベット順）

Appadurai Arjun (ed.). (2001). *Globalization*, Durham & London: Duke University Press.
Beeton. S. (2005). *Film-induced Tourism.* Clevedon: Channel View Publications.
Baerenholdt, J. O and M. Haldrup (2004) On the Tracks of the Vikings, pp.78–89 in M. Sheller and Urry John (eds) *Tourism Mobilities: Places to Play, Places in Play*. London: Routledge.
Brown, S. D. (2002) Michel Serres: Science, Translation and the Logic of the Parasite, Theory, *Culture & Society* 19(3): 1–27.
Bubandt, Nils and Otto, Ton. (2010), *Experiments in Holism*, Blackwell Publishin Ltd.
Callon, M. and Latour, B. (1981) Unscrewing the Big Leviathan: How Actors macrostructure Reality and How Sociologists Help Them to Do So, pp.277–303 in K. Knorr-Cetina and A. V. Cicourel (eds) *Advances in Soial Theory and Methodology: Toward and Intergration of Micro- and Macrosociologies*. Boston: Routledge & Kegan Paul.
Callon, M. (1991) Techno-economic Networks and Irreversibility, pp. 132–164 in J. Law (ed.) *A sociology of Monsters: Essays on Power, Technology and Domination*. London: Routledge.
(1986) Some Elements of a Sociology of Translation: Domestication of the Scallops and the Fishermen of St Brieuc Bay. In Law J. (Eds.), *Law, Power, Action, and Belief: A New Sociology of Knowledge?* pp.196–233. London: Routledge.
Cohen Erik (1988) Traditions in the qualitative sociology of tourism, *Annals of Tourism Research* 15(1) 1988: 29–46.
Cloke, P. and O, Jones (2004) Turning in the Graveyard: Trees and the Hybrid Geogra-phies of Dwelling,

Monitoring and Resistance in a Bristol Cemetery, *Cultural Geography* 11: 180–208.

Coleman, S. and M. Crang (eds) (2002) *Tourism: Between Place and Performance*. New York: Berghahn Books.

Davidson. Andrew. P. and Yu Yingmiao. (2005). *The Internet And The Occidental Tourist: An Analysis of Taiwan's Tourism Websites From The Perspective of Western Tousists*. Information Technology & Tourism, Vol. 7: 91–102.

Gordon, B. (1986) The souvenir: messenger of the extraordinary, *Journal of Popular Culture* 20(3): 135–146.

Graburn, N. (1997) Tourism and cultural development in East Asia and Oceania, in S. Yamashita, H. D. Kadia and J. S. Eades (eds), *Tourism and Cultural Development in Asia and Oceania*, Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia.

Hetherington. K. (1997) In place of Geometry: The Materiality of place, pp.183–199 in K. Hetherington and R. Munro (eds) *Ideas of Difference: Social Spaces and the Labour of Division*. Oxford: Blackwell.

Law John (1992) *Notes on the Theory of the Actor Network: Ordering, Strategy and Heterogeneity*. Available at: http://www.comp.lancs.ac.uk/sociology/soc054jl.html

Law John (1997) *Traduction/trahission: Notes on ANT*. Available at: http://www.comp.lancs.ac.uk/sociology/stslaw2.html. *Actor Network Theory and after*. Blackwell Publishing.

Law John & Hassard John (1999) *Actor Network Theory and after*. Blackwell Publishing.

Law John and Mol. A (2001) Situating Technoscience: An Inquiry into Spatialities, *Environment and Planning D: Society and Space* 19(5): 609–621.

Law John (2002) Objects and Spaces, Theory, Culture & Society 19(5): 91–105.

Latour, B. (1991) Technology is Society Made Durable, pp.103–131 in J. Law (ed.) *A Sociology of Monsters: Essays on Power, Technology and Domination*. London: Routledge.

(1999) On Recalling ANT. Law John & Hassard John (1999) *Actor Network Theory and after*. Blackwell Publishing: 15〜25.

(2005). *Reassembling the Social. An Introduction to Actor-Network Theory*. Oxford: Oxford University Press.

Marcus George, Holism and the Expectations of Critique in Post–1980s Anthropology: Notes and Queries in Three Acts and an Epilogue, from Bubandt Nils and Otto Ton, 2010, *Experiments in Holism*, Blackwell Publishing Ltd, pp.28〜47.

Mimi Sheller and Urry John (eds) (2004) *Tourism Mobilities: Places to Play, Places in Play*. London: Routledge.

Mol. A (1999) Ontological Politics: A Word and Some Questions, pp.74–89 in J. Law and J. Hassard (eds) *Actor Network Theory and After*. Oxford: Blackwell.

Moore Susan, Newsome David (2009) Wildlife Tourism, Science and Actor Network Theory. *Annuals of Tourism Research*. 36(4): 645–666.

Johannesson Gunnar (2005) *Tourism translations: actor-network theory and tourism research*. Tourist studies 5: 2. pp.133–150.

Oppenheim Robert (2007) Actor-network theory and Anthropology After Science, Technology, and Society. *Anthropological Theory*. 7(4): 471–293.

(2008) *Kyongju Things-Assembling Place*, University of Michigan Press.

Ren, C. (2011) Non-Human Agency, Radical Ontology and Tourism Realities. *Annals of Tourism Research*. 38(3): 858–881.

Ren Pritchard & Morgan. (2010) Constructing Tourism Realities. *Annuals of Tourism Research*. 38(3): 858–881.

Strathern, M. (2004) *Partial Connections*. Altamira Press.

Tinsley, R. and P. Lynch (2001) Small Tourism Business Networks and Destination Development, *Hospitality Management* 20: 367–378.

van der Duim (2007) Tourismscapes: an Actor-Network Perspective. *Annuals of Tourism Research*. 35(2): 574–595.

van der Duim & Ren (2012) *Actor-network theory and tourism: ordering, materiality and multiplicity*. London: Routledge.